間接キスはモスコの味

いちは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

間接キスはモスコの味

【Nコード】

N7107K

【作者名】

いちは

【あらすじ】

間接キス嫌いな主人公。

大学に入って半年ちょっと。

俺は男女混合の仲良しグループで集まり、安い居酒屋で飲んでた。

メンバーは七人。

男四人、女三人。

そんなグループが仲良しなだけで終わるわけがなく、誰それと誰それは付き合いそうだとか、キスをしたとか、そういった話題は、当人たち以外で集まる時の話題になっていた。

そんなグループの中に、アヤという女の子がいた。

アヤは、中学時代にソフトボール部でキャチャーをしていたらしく、そのためか骨太で肉付きも良くて、おまけに性格もサバサバしていて、

女の子らしい女性が好きな俺からしたら、何の魅力もないような女性だった。

さて。

飲み会の話に戻る。

まだビールが好きじゃなかった俺は、モスコミールを頼んだ。安い居酒屋のモスコミールは、たいてい美味しくない。ところが、その居酒屋のモスコは意外に良い味していた。

俺は思わず、

「あ、うめっ」
と言った。

誰も興味を示さない中で、アヤだけが食いついてきて、

「マジで？ 飲みたい飲みたい」と言い出した。

俺は、基本的に間接キスが苦手だ。男同士では、絶対にまわし飲みをしないし、女の子相手でも、物凄く抵抗がある。

しかし、まわし飲みがイヤとも言えず、アヤにモスコを差し出した。

アヤは、普段と変わらない雰囲気のまま、「どこ飲んだ？」

と聞いてきた。

俺は、一瞬意味が分からなかったが、要するに俺と間接キスをしたために聞いたのだと気付き、

「あ、そこ。ほら、ちよつとくもつてるとこ」

と答えると、アヤは俺が何か言う間もなく、

そのくもつた部分を自分の口にあててグビグビとモスコを飲んだ。

飲み会の帰り道。

アヤは俺に、

「私のサイン、分かった？」

と酒臭い息でからんできた。

「いや、分かるもなにも」

そう答えると、アヤは正気にかえったのか、

「ああ、そっか」

そう答えて、なんとなく寂しそうに離れていった。

その姿が、なぜだろう、なんとなく可愛かった。

「お前さ、キヤツチャーなのにサイン出すの下手過ぎ」

俺が笑いながらそう言うと、アヤは、

「基本、ピツチャーまかせだから」

そう言いながら、はにかんだ。

俺も酔っていたのか、その、はにかんだ感じがたまらなかった。

「一緒にバッテリーでも組むか？」

アヤと付き合ってみるのも良いだろう。

酒の勢いで、そう言ってみた。

アヤは、

「ん？ どゆ意味？」

キョトンとした顔でそう答えた。

「ああ……、お前、サインも下手だけど、キャッチも下手なのね」

俺はそう言いながら、アヤを抱きしめた。

「ナイスキャッチ」

アヤが、小声で言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7107k/>

間接キスはモスコの味

2010年10月22日00時13分発行